

## 「星月夜 鎌倉の府の傘寿会」

これは二十八回生の十六組のメンバーが続けて  
いる同組会の本年記録である。

我々は新学制実施に縁があつて、大戦が勃発した昭和十六年に国民学校に入学し、少国民として六年間を過ごしたのち 大戦後の昭和二十二年に国民学校最後の卒業生として国民学校の校門に別れを告げた。そしてまた新学制下の新制中学校を経て昭和二十五年春 桜花咲く湘南高校の門を潜つたのである。

七名の女子を含む十六組の教室は窓外に春光園を望み新学期特有のぎごちない空気に充ちていた。

『爾来六十四年今、特段の勇気を以てかつたの美少女美少年の上を過ぎ行きし星霜の無情の軌跡を確かめるべく鎌倉は若宮大路 段葛の極々に

一席を設けました。』とは平成二十六年春の二八十六の会案内状の一節である。

さて当日、梅雨入り宣言後のことながら台風並みに発達した低気圧は各地に大雨を齎しつつ東上、予想被害の報道に一驚して参加を取止めたメシバーも一・二を超した。既に葉桜となった段葛の緑に映えた傘寿の傘のうちの若干の訝しさは六十四の星霜を忽ちに越えてかつての美少年美少女の面影を彷彿とさせたのだった。

それからは年齢を忘れた諸兄から発注された日本酒が潤滑油となって談論風発、来し方の苦勞の数々！ だが体調・病の話は禁句にとの声もあったがそれとても自分史の一ページとということ以後話題は百花繚乱とあいなった。幹事努力で当初呑み放題に近い動きをみせた盃の軌跡も流石に往時程の事もなく入学時に歓迎してくれた相撲場脇の大樹の桜吹雪が風止むとともに何時か納まっていったようにいつしかさんざめき

は去り年齢相応の静かなムードに変わっていった。

やがて来る若宮大路の別れに なおも降り止まぬ無常の雨が濃くする段葛の狭霧をバックにしてひと時のカシフル効果の冷め始めたのを感じつつ、傘寿の面々は三々五々傘を分けていった。めいめいが手にした引出物の 鬘斗に目く

鎌倉に 相見る今日の

傘寿かな

平成二十六年六月七日 (早坂記)